研究課題　多可町杉原紙研究所所蔵寿岳文章和紙コレクション料紙調査研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　湯山賢一（多可町杉原紙総合調査委員会委員長）

　所内共同研究者　及川亘・石津裕之・高島晶彦

　所外共同研究者　安平勝利（多可町那珂ふれあい館館長）・大川昭典（和紙研究家・元高知県立紙産業技術センター技術部長）・本多俊彦（金沢学院大学文学部准教授）・富田正弘（富山大学名誉教授）

研究の概要

（１）課題の概要

　本コレクションは、日本前近代における紙の歴史の学術的研究について先駆的業績を残した寿岳文章氏が、その研究のため全国を回って蒐集した和紙原本の集積である。寿岳文章氏が新村出氏とともに、中世に最も使用された杉原紙の原産地として、多可町杉原谷の地を認定したのをきっかけとして、多可町で杉原紙の復興と研究の機運が高まり、杉原紙研究所が設立され、活動を続けてきたが、文章氏の没後、令嬢の章子氏から当該コレクションが杉原紙研究所に寄附され、研究所で整理が行われてきた。ただ、これまでの整理では、産地と紙の種類などの確認がなされているが、紙の厚さ・重さ・密度、原材料や填料、製紙法の解明など物理的技術的解明までは行われていない。  
この調査研究は、これまでの整理をさらに進化させ、上記の調査研究を進めようとするものである。確かに、このコレクションは、戦前に制作されたものではあるが、原材料や技術は前近代に近いものがあり、何よりも全国にわたって網羅的に蒐集されているところに意義がある。したがって、近世の製紙の地域的特質を考える上でも、重要な材料となることは間違いない。そして、これらの調査研究の結果を、数量的に、かつ顕微鏡写真などによって視覚的に、学界の共通素材として提供せんとするものである。

（２）研究の成果

　現在調査を終えたもののデータを例示すると、茨城県の西の内紙は楮繊維で米粉や柔細胞・表皮細胞の非繊維物質を多く含む。繊維配向は1.1347と緩やかに流れていてネリはあまり効いていない。  
滋賀県の鳥の子紙は雁皮繊維で米粉よりも径の大きい粒子が添加されている。柔細胞などの非繊維物質はほとんどない。繊維配向は1.0710とほとんど配向しておらず、ネリは効いていない。但しこれまでの調査でみた中世の鳥の子紙の配向は1.10以上あり、緩やかに配向している。  
和歌山九度山の高野紙は楮繊維で米粉などの填料はないが、柔細胞などの非繊維物質を多く含む。  
繊維配向は1.20以上の強い配向強度を示し、ネリが良く効いて勢いよく流れている。  
伊予の泉貨紙は楮繊維で米粉や柔細胞などの非繊維物質を多く含む。繊維配向は1.1775とやや高く普通に流れていて、ネリが程よく効いている。  
このように填料の量によって配向に差が生じているとみえ、これらの数値を参考に今後の課題とする。